

# 学生のためのドイツ語教育

羽 白 洋 (大学教育開発センター准教授)

## はじめに

ドイツ語は英語に比して文法体系の定型化が進んでおり、どの教科書でも文法の登場順はほぼ同じである。ともすれば教師は画一化された教え方を惰性的に続けることとなり、ある文法項目で、「どうしてこれが重要なのか?」「どれから覚えればいいのか?」「これを覚えてどうなるのか?」「覚えなくてもいいのはどれか?」等の学生の素朴な疑問に気を配ることを忘れ、メリハリのない授業を行いがちである。英語の重要性・必要性は認めるとしても、「英語以外の外国語不必要」との定見根拠なき風評を打破するためにも、今こそ教師は原点—自分が最初にドイツ語に出会った時の気持ち—に立ち返り、学生の立場を常に意識するドイツ語授業を行わなければならない。ドイツ語専門職を目指す学生対象ではなく、第2外国語(初修外国語)として学ぶ学生に対してのドイツ語教育はどうあるべきかを、ここで論じる。

紙数の関係で今回は、筆者が特に効果的と思われる教授法を含む文法項目—主として1年次生前期の範囲—について論じることとする。またここで「大学生」とは、医学部以外の学部生に限ることとする<sup>1)</sup>。

## 1. 教科書・授業

現在、幸町キャンパスに位置する教育・法・経済の3学部では同一の教科書を用いている<sup>2)</sup>。これは1年次では同学部学生で構成されていたクラスが、2年次では他学部との混成クラスになるため、2年次にもドイツ語を受講しようとする学生が同じスタートラインにつけるように、との理由からである。すなわち文法面から見て、既習得・未習得項目を統一しておくためである。しかしこれは教える側からの一方的な理由付けに過ぎない。教わる側の学生にとっては、他学部生と同じ教科書を使う必然性は全くない。とはいえ、従来から選択されている「統一教科書」は、すべて(教師にとって)幸いなことに内容豊富な総合教科書<sup>3)</sup>であり、教師はそのすべてを教える必要はなく、内容の取捨選択にその余地がある。なお現在使用している「統一教科書」は、『アプファールト』(三修社)である。

毎年学部によって、またクラスによりドイツ語学習意欲(Motivation)に微妙な差が見られる。教師は自分の担当クラス学生が、どの分野(旅行・音楽・食べ物・車・文化等々)に興味を持っているのかを早目に察知して、教科書からその分野のものを選び出す、あるいはサブテキストとしてプリントを用意する、視覚教材を活用することが、Motivation 惹起に効果的である。教師にとっては当たり前、常識と思われることが、学生においてはそうでないことが多い<sup>4)</sup>。そのギャップを埋めるためには、毎週2コマのうち1コマの授業の最初20分程度を、ドイツ語圏の国々の紹介(視覚教材、TVの録画あるいは教師の体験)に充てるとよい。このようにして教師は、少なくとも5月の連休明け、望むら

くは夏季休暇直前まで大半の学生の興味を、授業にそして自らに惹きつけ続ける努力をしなければならぬ。この頃までに重要な文法の基礎が形作られ、固められるからである。

次に重要なのは、学生の既修外国語（英語）の知識がどの程度<sup>5)</sup>であるのかの把握である。初期の時点で「英語で…というように…」 「英語だったら…だが…」とか「この言葉は英語の…に対応して…」と言いながら、学生の目を見つめてその反応・理解度を確かめることを教師はしなければならない。この作業を怠ると、学生の全く知らない世界の言葉が黒板に踊り、それを説明する教師の言葉が静まりかえった教室に空しく響く光景が展開することになる。詳細は各文法項目の項で述べる。

## 2. 辞書

ドイツ語選択学生に対し、独和辞典の購入・授業への持参をシラバスで義務づけているが、これに限ると一冊に指定はしていない<sup>6)</sup>。学生の自由選択となっている。授業中に散見したところによると、『エクセル』（郁文堂）、『パスポート』（白水社）、『アポロン』（同学社）、『クラウン』（三省堂）が一般的であり、『アクセス』（三修社）、『フロイデ』（白水社）、『マイスター』（大修館）の使用者は少ない。ごく稀に父親から譲り受けたという『木村・相良』（博友社）を使う学生もいるが、その場合正書法（Rechtschreibung）のことに注意を払わなければならない。講義の途中で学生に何らかの単語を辞書で引かせることが予想される場合は、教師は事前に少なくとも上記4種の辞書で該当単語を調べておくべきである。品詞・不規則動詞・名詞の性別等、その表示法が各辞書で異なっているからである<sup>7)</sup>。それ以前の授業中に机間歩行しながら、学生の持っている辞書の種類を把握しておくことが望ましい。板書の際にも各辞書の表示法をできるだけすべて示して、学生に「自分の使っている辞書の存在感」を実感させることが必要である。学生にとって、自分の辞書が教室で中心的な存在なのだと感じることは、その後の学習に積極的に参加する意欲をいだかせるものである。

近年目立って増えてきたのが、「電子辞書」である。紙製辞書に比べ、高速検索が可能・ネイティブの発音が聞ける・携帯に便利といった特徴を持つ電子辞書である。どの辞書が内蔵されているかはそのメーカー名から大体推察できるが、中には本物の辞書ではなく、「ドイツ語旅行会話」「ドイツ語フレーズ集」といった類のものしか収録していないものもあるので、注意しなければならない。4月当初辞書を紹介する時、従来の紙製辞書の紹介と共にこの電子辞書の特徴・注意点についても述べる必要がある。特に次のようなデメリット点は強調しておくべきである。電子辞書は、①アルファベット一つのキータッチミスで全く違う単語を示すこと、②液晶画面が狭いためその単語の全体像がつかみにくい、すなわち一覧性が低いこと、③動詞の場合、その熟語・用例は、一般に **用例** キーを押して呼び出さなければならない、各熟語・用例間の重要度・使用頻度が把握できないこと、④付箋・マーキング機能のついた機種が少ないこと、⑤電池の消耗具合を常に確認しておかねばならないこと等である。近い将来、iPad、GALAPAGOS、Reader等タブレット型多機能情報端末の電子書籍に辞書が収録され、紙製の辞書のページをめくるように使えるようになれば、これらのデメリット点の大半は解消するであろう。

### 3. アルファベット

ドイツ語圏の国々の紹介等の導入部分が終わった後、アルファベットの表を前にして、学生にまず何を語り始めるか。新しくその形から覚えなければならないロシア語・ハングル・アラビア語等と違い、英語と同じ26文字が基礎になっていることを述べて、学生に親近感と安心感を与えるのが肝要である。ラテン文字の筆記体も「君達の知っている英語の筆記体と同じ」と断言してよい<sup>8)</sup>。

次に学生に是非理解させたいのは、「アルファベット文字の名前を覚える重要性」である。中学校、最近では小学校で英語を習い始め、その最初はABCを[éi][bí:][sí:]と発音しながら、文字の名前をZ[zéd][zi:]まで覚えさせられたはずである。その記憶を学生に呼び戻させた後、英語でその文字の名前を覚えたことが、実際の単語の発音にどの程度役立っているかを問いかけてみる。大多数の学生の頭の中では、文字の名前と単語の綴りの発音は別物と認識しているはずである。最初の文字の名前[éi]Aは、nameの時は確かに[éi]と発音されるが、その前後の文字と呼応して様々に発音される。例えばcat[æ] / ball[ɔ:] / task[æ][á:] / many[e] / vocal[ə] / usage[i]等を板書して、英語では文字の名前と発音とが必ずしも一致していない、否一致しない場合の方が多<sup>9)</sup>をわからせる。これに比べてドイツ語では最初の文字Aの名前は[a:]であり、この文字はどんな綴りになっても、「長く[a:]と発音するか、短く[a]と発音するか」の二つに一つの音しか持っていないこと<sup>10)</sup>を説明する。残りの母音4つ(E,I,O,U)も単独で登場する場合はAと同様であることを示す。次に英語の単語minuteを板書しその発音を学生に問う。大半の学生は[mínət]と答えるであろうが、この綴りにはもう一つ[main(j)ú:t]という発音のあることを説明する。つまり英語では品詞・コンテキストによって発音が違う場合があるが、ドイツ語ではそのようなことは一切ないことを強調する。従ってドイツ語では「意味のわからない単語でも発音は可能」であることを理解させる。子音についても、その文字の名前を覚えることが発音と直結していることを説明すれば、「アルファベット文字の名前を覚える重要性」がわかってくれるであろう。

母音A,E,I,O,Uの名前は基本中の基本であるから、まずはローマ字と同じ[アー][エー][イー][オー][ウー]であると覚えさせること。次にその正しい発音を教師自ら大声を出して教える。ここで学生との信頼関係構築のため重要なことは、最初はCD・テープ等を使わず、教師が学生の目の前で肉声を出すことである。教師が正しい発音に自信がない時のみ、第二段階としてネイティブ録音のCD・テープを使用<sup>10)</sup>し、本物の音を学生の耳にたたき込み、学生がその音を復唱できるまで続ける。小中学生と違い、大学生はとかく人前で「口を大きく動かす」、「大きな声を出す」ことを嫌う傾向がある。しかしどんなに消極的なクラスであっても、その内何人かは大声を出してくれる学生がいるはずだから、その学生を見つけ出しおだてあげ褒め称えて、この傾向を打破することに、教師はエネルギーを費やす必要がある。「[a:]は日本語の[アー]よりも口を大きく明るい音」、「[e:]はどちらかと言えば[イー]に近い[エー]」等、その音の説明・出し方は従来から行われているもので十分であろうが、「口先で音を出さずお腹から出すこと」、「口の周りの筋肉が痛くなるほど大げさに動かして音を出すこと」の2点を付け加えておきたい。

変母音Ä,Ö,Üに関しては、教科書での表記に特に注意を払わなければならない。この3つの文字の名前—(A-Umlaut)(O-Umlaut)(U-Umlaut)—を表記すべき場所に、その発音—[ɛ:][ø:][y:]—が示してある教科書が多く見られるからである。文字の名前とその文字の持つ音、この2つを混同してし

もう学生が出ないように、教師ははっきり説明しなければならない。Umlautの意味<sup>11)</sup>も説明しておけば、学生の記憶がより一層鮮明になる。同時にここでßにも触れておきたい。文字の名前は(エスツェット)、持っている音は[s]であることを説明する<sup>12)</sup>。エスツェットは、この2つの文字sとzをドイツ文字の筆記体で板書すれば、この2つの文字の合字(Ligatur)であることが明白になり、決してβ(ベータ)ではないことを理解してもらえらるだろう。

教科書でアルファベットAからZまでの26文字を示す表は旧態依然として同じであり、Aから順番に教えていくのが一般的である。最終的に学生にはすべての文字の名前を覚えてもらうのであるが、筆者の経験上、最も学生の記憶が早く効果的と思われるのは、「子音」を3つのグループに分けて教えるやり方である。上記の5つの母音A,E,I,O,Uにおいて、文字と音とが一致した後、①英語とほぼ同じ名前のグループ、②母音のグループ、③それ以外のグループに分けて教える方法である。

#### ① F,L,M,N,S,X

厳密に言えば異なっているのだが、「英語と同じ名前だ。」と言えば学生は安心してすぐに覚える。X[ks]は英語[éks]と音は異なるが、使用頻度の少ない文字であり、少なくともこの文字を見たら[ks]の音が頭に浮かべるように導けばよい。MとNの区別ができない学生も多くみられるので、口の開閉、舌先の位置を注意して教えなければならない。Lは最後の③グループのRを教える時に再度登場させる。

#### ② A系：H,K / E系：B,C,D,G,P,T,W / U系：Q

例えばA系では、母音Aの前に[h]や[k]をつけて発音するように教える。

E系で学生が違和感なくすぐ発音できるのは、B[be:], D[de:], P[pe:], T[te:]であろう。

G[ge:]は英語のG[dʒi:]の影響が残る学生も若干見られるので、「英語よりローマ字」を強調しておく。

C[tse:]は、少数の外来語・固有名で用いられる文字であり、大多数の単語において[k]の音になる<sup>13)</sup>ので、この文字の名前[tse:]を強いて教え込む必要はない。

W[ve:]は③グループのVと対照して説明することにし、ここでは同じE系のB[be:]との音の相違を明確にさせることが重要である。

U系のQ[ku:]の文字は、常にuを伴ってqu[kv]の形でしか登場しない。従って「発音」の項での説明にとどめればよい。

#### ③ J,R,V,Y,Z

Y[ypsilon]の名前を教える必要はない。この文字を見たら「ヤ行の音を思い出すこと。」の説明で十分であろう。もっとも胃腸薬(パンシロン)に似ているためか、「覚えなくてもよい。」と言えど覚えて覚える学生もいるが、J[jot]は発音記号も[j]であるためか、[dʒ]の音と思い込みがちなので注意する。Juli / Juni / Japan / jung等英語と似た綴りの単語を板書しその違いを音で確認させ、「次回の授業から出席の返事は„Ja!”を使うように。」と締めくくれば万全である。V[fau]も英語の影響で[v]の音を持っていると思われがちである。「[v]の音はW、Vは[f]の音」だと繰り返すしかない。どちらも文字の名前より重要なのは、その文字の持っている音[f][v]であることを、Vater / voll / was / wennあるいは車名・会社名Volkswagenの略称VW等を板書し何度も練習させることである。

R[er]は①グループのL[el]との区別をはっきりさせる必要がある。どんな学生にもできる区別は、L[l]の音を発音する際「発音が終わっても、舌の先を上歯の裏側から離さないこと。」を守らせれば簡単である。R[r]はそれに対して「舌を口の中で遊ばせる。」「日本語のラ行でもよい。」と教えれば大半

の学生が安心する。つまり、正しい R[r] を発音するのは難しいが、舌先の位置に注意するだけの L[l] の音をいつもぶれずに出せれば、両者の区別ができるからである。Z[tsɛt] も英語の影響で [z] の音を持っていると思う学生が多い。思い切って Z=ts と示すのも一計であるが、次のような誰もが知っているであろう固有名詞あるいはそのロゴからわからせるのも効果的である。すなわち、車名：Benz[ベンツ]、自動車会社名：Mazda[マツダ]、食品会社名：Mizkan[ミツカン]等。

## 4. 発音

大半の教科書において、発音は見開き 2 ページにまとめられている。中には、「こんなにたくさん規則があるのか。」と尻込みする学生もいるので、筆者は逆に「これだけしか規則はないよ。英語の場合、発音がこのように 2 ページでまとめられますか？つまりこの見開き 2 ページがわかれば、ドイツ語の文は読めるようになるよ。もっともその内容はわからないだろうけれど。」と希望を与えることにしている。母音の説明が一通り終わった時点で、教科書の後ろの方の適当なページを選び、学生と一緒に音読してこのことを実感させるとよい。なお発音を教えるどこかの段階で、「大文字で始まっている単語は名詞であること」を学生に気付かせ、「この習慣が残っているヨーロッパの言語はドイツ語だけであること」を豆知識として教えておくのがよい。

発音の 4 原則—①ローマ字のように発音、②アクセントの位置、③次に位置する子音の数による母音の長短、④母音の後の h—に関して特に異論はない。ただ「単語のアクセント」の意味を明確にしておかねばならない。日本語で単語のアクセントとは、「高低アクセント」であるのに対し、ドイツ語では「強弱アクセント」であること<sup>14)</sup>を早目に教えておくのが好ましい。

また単母音・変母音・複母音及び重母音、そして子音の説明へと続く順番もこれでよいであろう。しかしそれぞれの例として示す単語は慎重に選別すべきである。教科書によっては、単母音・変母音を説明するところで、(1) その後で教えるはずの複母音の綴りが入った単語、(2) ローマ字では読めない子音の発音を含む単語を示す等、学生の理解度を無視した例示<sup>15)</sup>が見られるからである。

変母音の発音教示の際、「変母音も母音の一種」、従って「その長短は単母音の場合同一」をまずはっきりさせておくこと。教師がその発音、特に Ö と Ü の発音方法に力を注ぐあまりこのことを忘れがちになり、学生に誤解を招きかねないからである。Ö 及び Ü は、その長短によって発音記号が異なっているが、無視してよい。

複母音のうち au は、他の重要な綴り (ei, ie, eu, äu) と比べてこの段階で強いて教える必要はないと考える。文字通り [au] の発音でも許容範囲内であるからだ。ch の発音を教える時に、[u] (ウ) ではなく [ʊ] (オに近いウ) と教えて十分間に合うと思う。

学生にとって大多数の単子音の発音は、3. アルファベットで文字の名前を確実に理解していればさほど難しさは感じないはずである。やや例外的発音になる「語または綴りの末尾の -b, -d, -g」についても、この 3 つをまとめて教えれば理解は早い。ただし一部、というよりかなりの数の学生に見られる「子音の後ろに母音を補う傾向」は、耳を澄まして排除しなければならない。

複子音のうち、学生にとって一番難しいのは、今まで見たこともない発音記号 (音標文字) [x] と [ç] が使われている ch の発音であろう。既習英語から直感的に [tʃ] の音を思い出すがまったく違う音、そ

れも二つも持つこの複子音をマスターするには、教師がこの複子音を含む単語をできるだけ多く示して<sup>16)</sup>、その区別を学生の体にしみ込ませなければならない。a, o, u の後に位置する ch[x] の発音に比べて、au の後の ch 音が [hu] あるいは [f] になってしまう学生が多いことにも注意を払わなければならない。

## 5. 人称代名詞（1 格）

まず日本語で「自分のことを指す言葉」を学生に思いつく限り発言させる。おそらく、「私（わたし、わたくし、あたし）僕」ぐらいであろうから、「私（あたい、わたい、わし、あつし、わて）、我、俺、おら、あちき、手前、小生、吾輩、おいどん、拙者、予、朕」等の言葉<sup>17)</sup>を追加し、日本語ではその数の多さ、男女性語の区別・謙譲語等があることを再認識させた後、ドイツ語ではとにかく「自分のことを指す言葉（自称 = 1 人称）は ich だけ」との事実を文法用語「人称代名詞 1 人称単数」と共にたたき込むこと。次に 1 人称複数<sup>18)</sup>、3 人称単数・複数<sup>19)</sup> の順で同様に教える。英語の I=ich、we=wir、he=er、she=sie、they=sie と明示して構わない。少し横道にそれて、英語の I がなぜ大文字なのか<sup>20)</sup>、を話すのも学生の興味を引くであろう。英語が苦手な学生もこの段階までは全員理解できているはずである。ただ sie という形が、3 人称単数・複数の 2 か所に出現していることには少し配慮しなければならない。挙手して質問はしないまでも、「英語なら全部形が違うのに、ドイツ語ではどうやって区別するのだろうか。」という疑問を抱く学生が少なからずいるからだ。動詞の人称変化を教える前のこの段階では、「区別不可能、sie= 彼女は / 彼等は、彼女等は、それらは」としておく。

格 (Kasus) の概念についてもここで少し説明しておくことが望ましい。1 格 (主格、Nominativ) から 4 格 (対格、Akkusativ) まで 4 つの格の詳細説明以前に、「格」そのものの説明を行う。経験上、学生には次のように説明するのがわかりやすいようである。格とは、「文の中でその名詞と他の語との関係」・「資格の格」・「日本語では、格 = 名詞 + 助詞」、ここで名詞「私」に助詞「が、は」<sup>21)</sup> を付して説明する。「先程の説明とやや矛盾するが、ich ≠ 私 (ich は私ではない)、ich = 私が、私は」、つまり「文の中で ich が出てくればそれは主語 (1 格)」。ほかの 4 つの人称代名詞も再度助詞を付けて記憶させる。(wir = 私達は、私達が / er= 彼は、彼が ...)。文法用語の説明としては冗長になるが、「ich = 人称代名詞 1 人称単数 1 格」と理解・記憶させる。

最後に残った「人称代名詞 2 人称 1 格」の du, ihr / Sie については、説明過多に陥らないよう気をつけなければならない。学生がドイツ語で神に語りかけることはまずないだろうから、親称 2 人称 du の説明からは省くべきである。「du, ihr は文字通り『親称』の関係の相手間—夫婦・親子・兄弟姉妹・友人・同僚—と、子供および動物に対してのみ使うもの」とすればよい。「それ以外の相手とは、相手が一人でも何人でも敬称 2 人称 Sie を使う。」との説明が簡潔で好ましい。「Sie は 3 人称複数の sie を土台に作られたもの、その理由は...」「du は英語の thou と語源が同じで...」等々の説明は、教師の独りよがりの知識披露であって、学生をいたずらに混乱させるだけである。

## 6. 動詞の現在人称変化

この項目では誰もがまず「Infinitivとは？」から話し始めるであろう。「動詞の原形」・「辞書に載っている元の形」と説明したのち、英語では用いない文法用語「不定詞」(不定形)を学生の記憶に定着させなければならない。そのために日本語の動詞、あるいは英語の動詞を幾つか板書し、不定の詞(ことば)、何が「不定」なのかを考えさせる。学生から「主語が不定」との答えが出るまで十分時間をかける必要がある。この不定詞の定義・概念をしっかりと把握していないと、以後の動詞関連の用語—定動詞(定形)、定動詞正置・倒置・後置、zu不定詞等—の理解が困難になるからだ。

次に「語幹」「語尾」の説明であるが、「語幹(Wortstamm)」という言葉は注意深く説明しなければならない。よく使われる「木に例えれば幹」という譬えと「その動詞の意味を持っている重要部分」との説明が、うまく結びつかない学生が多く見られる。「木にとって大切なのは幹より根だろう。」と呟く者もいる。「幹」を「木の幹」とせず、「幹部」・「主幹」・「新幹線」・「幹線道路」の「幹」だと説明の方が学生には理解しやすいようである。「語幹」に対し「語尾」の説明には何ら問題はないようだ。不定詞に2種類の語尾が存在することも、割合すんなりと学生は受け入れてくれる。また「不定詞」の定義がはっきりしていると、「定動詞」(定形)という用語の理解も早い。

しかし、人称変化語尾を不定詞にそのまま付けて定動詞にする<sup>22)</sup>者も少なからずいるので注意が必要だ。それは教師の「不定詞はその動詞の意味だけ持っていて主語が不定だから不定詞という。」という説明を忠実に守っている結果であり、「その動詞の意味を持っている部分は語幹」を強調しなかった教師の責任でもある。人称変化語尾を「エストテンテン」<sup>23)</sup>と教えることに反対はしないが、4.発音で触れた「子音の後ろに母音を補う傾向」には注意すべきである。幾つかの動詞を板書し現在人称変化させる場合、教師は往々にして、一番左側に人称代名詞を縦に並べ、その右へ動詞を複数並べて書いてしまう。これでは主語と定動詞の関係が希薄になるから、どの動詞にも必ず主語をつけて変化させることが学生の記憶に効果的である。学生に担当させて板書させる場合も、このことには注意をしておく必要がある。

最後に、3人称単数の現在人称変化について重要なことを一つ付け加えておかねばならない。ほかの1人称・2人称と異なって「-tの語尾になるのは主語がer, sieのみではない。主語が人名でもありうる。」<sup>24)</sup>ということを学生に理解させることだ。教師にとっては常識であろうが、主語をPeterやPetraにして動詞を変化させると、戸惑う学生が結構多い。3人称複数の場合も同様に、Leute, Ferien等複数名詞を例として示す必要がある。不規則動詞sein, habenの現在人称変化を教える時にもこのことを忘れてはならない。

## 7. 名詞の性

2種類の「性」—「自然界の性」と「文法上の性」—の説明から始めるのだが、ドイツ語ではGeschlechtとGenusと使い分けられるのに比べ<sup>25)</sup>、日本語は「性」の一語しかなく教師泣かせの項目である。この語にとらわれることなく、「ドイツ語の名詞はどれも『男性名詞と呼ばれるグループ』『女性~』『中性~』という3つのグループに分けられている。」と男性・女性・中性をグループ名とするのが、

学生には一番わかりやすいようである。

次に黒板を縦に3分割し、それぞれのグループに属する名詞を書き示していく。男性名詞グループと女性名詞グループに属するものから始めるが、自然界の性（Geschlecht）と文法上の性（Genus）が合致しているもの（Mann, Frau, Vater, Mutter, Bruder, Schwester, Sohn, Tochter, Onkel, Tante 等）は、どの学生も違和感なく受け止めてくれるはずだ。ここでは Mädchen, Fräulein はもとより、雌雄の区別があるが総称としての動物名 Hund, Katze, Maus, Hirsch 等の単語は、学生の頭の中に不必要な混乱を引き起こさないためにも示さないほうがよい。

ここで話を一旦3人称単数の人称代名詞に戻して、英語の he, she, it とドイツ語の er, sie, es との相違点を説明する。すなわち、「昔の英語にはドイツ語と同じく文法上の性（Genus）の区別があった<sup>26)</sup>が、現代英語はもうそれを持っていない。今の英語の he, she, it は自然界の性（Geschlecht）を基本としている。極論すれば、he は♂、she は♀の記号であらわしてもよいほどだ。そして性のないもの、無生物はすべて it になっている。」英語が得意なあるいは好きな学生が多い教室では、「現代英語でも、主観的ではあるがその対象物を男性的だとか女性的だと思う時には、本来なら it で受けるはずの無生物を擬人化して、he や she で受けることがある。例えば he=death, mountain, war, sun ; she=city, ship, nature, moon。」<sup>27)</sup>と付け加えれば学生の興味を引くであろう。

次に、教室内のもので無生物—英語では it で受けるもの—を3グループに分けて示していく。中性名詞の Papier, Etui, Wörterbuch, Heft, Fenster はよいとしても、Tisch, Wand, Boden, Decke, Stuhl, Tür, Kuli, Kreide, Fernseher, Wandtafel, Schalter, Tasche, Text, Röhre と示していくと、ざわめきが起こる。ここで「英語の the と同じ」と言いながら各グループに定冠詞1格（der, die, das）を付していく。印刷スペースが無駄だと理由であろうか、ほぼすべての教科書で、「der Tisch 机」「die Tür ドア」と記述してあるが、教室では「der Tisch 机が / は」「die Tür ドアが / は」「das Fenster 窓が / は」と板書するのが望ましい。暗に1格だとわからせるためである。上述の下線部を施してある単語については、事前に張り紙—das Fenster—として用意しておき、授業時間中にその物へ貼付すれば、学生の理解・記憶に効果的である。無生物にも「文法上の性」があることを理解してもらったところで、Kind, Baby を登場させる。「子供」「赤ん坊」が中性名詞であることに学生はさほど違和感を覚えないが、「自然界の性」と「文法上の性」とが一致しない動物名（Huhn, Pferd, Rind 等）の提示は極力避けておくことが望ましい。筆者の経験上、Hahn, Henne / Hengst, Stute / Ochs, Kuh 等の単語と学生の頭の中で混乱を起こしかねないからである。

3人称単数の人称代名詞（er, sie, es）の役割をここで改めて説明する。英語の（he, she, it）との相違から入った人称代名詞の説明が、この段階では英語と切り離しての理解が可能になるからだ。すなわち、er が「人間の彼」と共に「男性名詞」を、sie が「人間の彼女」と共に「女性名詞」をさすことを大多数の学生は納得する。

「名詞の性の見分け方は？」との質問には「大体の目安はあるけれども、知らなくてもいい。いや今は知らない方がいい。」と返答しておく。語尾 -ling, -ist, -keit, -ung, -lein, -chen 等を持つ単性の名詞を例に出してもいいが、例外のある -er, -e, -tum<sup>28)</sup>等の説明に窮することになり、またこの語尾を覚えるよりも、一つでも多くの単語を定冠詞付きで覚える方が学生のためになるからだ。時間に余裕があれば、複合名詞の性についても触れておくと、意欲的に予習しようとする学生には役に立つ。

## 8. 冠詞

冠詞の説明の前に、名詞の4つの格—1格（主格、Nominativ）・2格（属格、Genitiv）・3格（与格、Dativ）・4格（対格、Akkusativ）—を学生に理解させておかねばならない。多くの教科書では、1格・4格・3格の順に登場させており、2格を省略したり、省かないまでもずっと後にまわしている。この方法では、格ひいては冠詞の全体像を捉えにくくするばかりか、最後に登場する2格を特殊なものとみなすことになってしまう。加えて辞書での名詞表記法の説明に支障をきたす<sup>29)</sup>。筆者の経験上、名詞の後ろに日本語の助詞を補う方法で格を説明する場合、4つの格を一度に示すのが大多数の学生にはわかりやすいようである。2格を他の格—3格（～に）、4格（～を）—と同様に（～の）とすればいいのであって、その使い方までここで述べる必要はない。

冠詞には、個別化的冠詞・総称的冠詞等いわゆる冠詞の3用法があるが、とにかく「次に位置する名詞の性・数・格を示す役割が最大の任務」と教えておくのが最も効果的である<sup>30)</sup>。「複数では性の区別をしない」ことを述べた後、定冠詞の変化を板書する。名詞の変化も同時に示すか、定冠詞のみにするかについては、対象学生の理解度により決定する。英語ならば the しかないのに、男性1格の der から複数4格の die まで16か所もの数の多さに学生は圧倒され、一部絶望感も漂う。これまでの教師は、そのようなことは一切斟酌せず「これは基礎中の基礎、丸暗記すること。」と学生に言い渡すのが常であったし、現在もそのような教師は多い。確かに最終的には丸暗記しなければならない重要事項だが、これでは学生は委縮しドイツ語嫌いになってしまう。ここで筆者は、前述した「冠詞の役割」を加味して視点をちょっと変えた説明、結果として学生の記憶の一助となる説明をすることになっている。手前味噌になるが、これは非常に効果的である。

すなわち、

①定冠詞は16か所に散らばっているが、16種類ではなく6種類（der, des, dem, den, die, das）しかない。

②この6つの定冠詞の後ろにはそれぞれ何名詞の何格がくるか、書き出してみる。

②の結果として、 der : m.1,f.2,f.3,pl.2      des : m.2,n.2      dem : m.3,n.3  
den : m.4,pl.3      die : f.1,f.4,pl.1,pl.4      das : n.1,n.4

③これからわかることは、

- (1) des の後ろには、男性・中性の区別はできないが2格。
- (2) dem の後ろには、男性・中性の区別はできないが3格。
- (3) das の後ろには、1格・4格の区別はできないが中性しかこない。
- (4) die の後ろには、単数・複数の区別はできないが1格か4格。
- (5) der の後ろには、中性はこない。
- (6) den の後ろには、女性・中性はこない。

④少なくとも最初の(1)(2)(3)を覚えれば、名詞の性・数・格が辞書を引かなくてもある程度推測できるようになる。

繰り返しになるが、この説明は画期的であり学生の理解・記憶に大いに貢献するものであると筆者は自負している。

同じ「冠詞」であるのに、英語の the と a (an) の形の違いからの思い込みなのか、定冠詞と不定冠

詞はまったく別物<sup>31)</sup> と思っている学生が結構多い。不定冠詞の変化は次のように教えるのが効果的である。すなわち、定冠詞の変化と不定冠詞の変化を横に並べて板書した後、「定冠詞の d- を ein- に置き換えれば、ほぼ不定冠詞の表になる。」と説明しながら定冠詞を置き換えていく。学生にもノート上で同じ作業をやらせる。これで出来上がった「Pseudo 不定冠詞変化表」と「Echt 不定冠詞変化表」とを学生に比較させ、類似点・相違点を認識させる。中には、einie, einer, einen, einie と複数まで置き換える学生も出てきたところで、ein= 英語の a (an) に当たることを再確認させる。許容誤差の範囲内である女性 1・4 格の微修正 (einie→eine) は無視し、男性 1 格と中性 1・4 格の 3 か所に注意を向けさせる。

## おわりに

以上、ドイツ語教授の初期段階、アルファベットから冠詞までの教授法について論じた。更なる文法項目の教授法に関しては次稿で論ずることとする。いずれにしてもこの論の目的は、筆者が経験から見つけたあるいは編み出したドイツ語授業の Know-how を、次世代の方々へ伝えるためである。

ドイツ語教師は、

学生が疑問に思うであろうことを常に先取りして説明していかなければならない。

学生の理解に寄与する時以外、自分の知識をひけらかしてはならない。

常に最新のドイツ語圏の情報を入手しておかねばならない。

そしてドイツ語教師は、業績点稼ぎの研究者である前に、一介のドイツ語教師であらねばならない。

## 注

- 1) 他学部生と偏差値・入試成績等の大きな相違に加えて、医学部では毎年多浪人生・他大学経験者が多く入学している。すなわち外国語教育の面から見れば、各学生の外国語に関する「下地」の差が大きいため、他学部とは異なった教育法が必要となるからである。
- 2) 「統一教科書」として、2007 年度:『アクティブに使うドイツ語』(三修社)、2008 年度:『シュトラッセ・ノイ』(朝日出版社)、2009 年度から『アプファールト』(三修社)が使用されている。
- 3) 「総合教科書」とは、従前のように「文法」「読本」の 2 種に分かれたものではなく、いわゆる語学の 4 要素(「読み」「書き」「聞き」「話す」)を総合的に扱ったもの。ただし近年の傾向として、付録の CD あるいは DVD を使ったコミュニケーション能力養成の比重が高く、文法事項の説明は少なくなっていて、それを説明する教師の負担は大きい。
- 4) 多くの学生が誤解していることで例えばベルリン(Berlin)は、(1)DDR(旧東ドイツ)の中ではなく、BRD(旧西ドイツ)と DDR の国境に位置する、(2)ベルリンの壁は旧西ベルリンの周囲ではなく、旧東西ベルリンの間にのみ存在した、等がある。それ以前にベルリンが首都であることやベルリンがドイツのどの辺にあるのかを知らない者も多い。
- 5) これは文法を説明する際、特に重要である。いわゆる文法用語(人称・代名詞・形容詞・副詞・時制…)の知識が乏しい学生が近年多く見られるからである。言葉として「形容詞」「副詞」を知っ

ていても、その区別ができない学生が特に目立つ。

- 6) 『全学共通科目シラバスⅡ（外国語科目編）平成22年度版』116頁。
- 7) 例えば『エクセル』では、不規則動詞の表示（見出語の左肩に付ける\*マーク）がない。  
最近では、名詞の性を昔の『木村・相良』のように m.,f.,n. で示す辞書は少なく、男、女、中と示すものが多い。
- 8) A,H の大文字、R,Z の小文字等が完全に異なっているが、英語・ドイツ語の両者を混在しない限り相互理解に支障はないため。ただし最近の中学校では筆記体を教えていないとの情報もある。またドイツ文字の筆記体については、B の文字の構成要素 (s+z) を説明する時に示すにとどめること。
- 9) 英語でも 15 世紀頃までは綴りと発音とは一致していた。三好『新独英比較文法』13 頁。
- 10) 教科書付属の CD・テープはどれも ABC 順にしか録音されていない。母音のみのものに再編集して使用することが望ましい。
- 11) um(変更)+ Laut(音)=変音
- 12) B の持つ音が [s] であると説明する時同時に、英語の th の音がドイツ語にはないことも付け加えておくとよい。
- 13) C は a, o, u, r, l の前で [k]、ä, e, i の前で [ts] となるが、前者は k、後者は z での書き換えが多い。
- 14) 吉島・境『ドイツ語教授法』40 頁。
- 15) (1) の例としては、Fieber(アプファールト)、(2) の例としては、schlafen, spät, München, Käse, Sänger(アプファールト) / sehen, Sohn(シュトラーセ・ノイ)。このことに配慮した教科書としては、拙著『みんなのドイツ語』（白水社）を参照されたい。
- 16) 喉音 ch の例：ach, Fach, acht, Macht, Nacht, Bach, Dach, machen, auch, Bauch, Brauch, Hauch, Rauch, rauchen, tauchen, euch, doch, noch, Koch, Kocht, hoch, Loch, Tochter, Mittwoch, Buch, Tuch, Flucht, Kuchen  
舌音 ch の例：ich, Teppich, Licht, nicht, echt, recht, reich, leicht, Milch, Kirche, möchte, Bücher, China, Chemie, Nächte, Mädchen, Märchen, München
- 17) 大野・浜西、1985、754 頁以下（注 18・19）も同様。
- 18) 自称複数：私達、私共、我等、我々。
- 19) 他称単数・複数：彼、彼女、奴（やつ、やっこ）、そいつ、あいつ・彼等、彼女等、あいつら、奴等。
- 20) 「英語の I は歴史的には ic → ich → i → I と変遷しており、i となったのは 14 世紀頃である。その頃は i と小文字で書かれたが、あまり小さく不明瞭なため、便宜上大文字で書くようになったのである。イギリス人が自我意識が強いため、I を大文字にするというのは俗説である。」三好、1977、28 頁。
- 21) 蛇足ながら、日本語のこの二つの助詞の区別に関しては次の書籍が興味深い。  
坂野信彦著（2006）『ハとガー助詞「は」と「が」の原理』星雲社。
- 22) ich wohnene, du wohnest, er wohnt ...
- 23) 人称語尾のみ横に並べ -e, -st, -t, -en, -t, -en, それをローマ字読みしたもの。
- 24) 「男性名詞を er で、女性名詞を sie で云々」については、この段階ではまだ触れぬ方がよい。
- 25) „das natürliche Geschlecht“ と „das grammatische Genus“ Helbig・Buscha. 1988. *Kurze deutsche Grammatik für Ausländer*. 269 頁。

- 26) 英語も13世紀頃までは性 (gender) を持っていた。三好、1977、32頁。
- 27) 三好、1977、33頁参考。
- 28) 男性名詞の2語 *Irrtum*, *Reichtum* 以外中性名詞を作る語尾 *-tum* であるが、文法書の定本として有名な橋本 (1956、35頁) は、「*Reichtum* を中性名詞」と誤って記述している。
- 29) 一般的に辞書で名詞は、見出し語 [発音] 性別、sg. 2格形 /pl. 1格形 と表記してあるため、2格の存在を避けて通れない。
- 30) 冠詞の役割をこの一つに限っておけば、形容詞の付加語的用法 (強変化・弱変化・混合変化) の説明が簡単になり学生の理解も得やすくなる利点がある。
- 31) 起源を考えれば確かに別物である (定冠詞<指示代名詞 *der*、不定冠詞<数詞 *eins*)。

## 参考文献

- 大野晋・浜西正人著、1985、『類語国語辞典』角川書店。
- 東京外国語大学語学研究所編、2003、『世界の言語ガイドブック 1 (ヨーロッパ・アメリカ地域)』三省堂。
- 中島悠爾・平尾浩三・朝倉巧著、2003、『改訂版 必携ドイツ文法総まとめ』白水社。
- 橋本文夫著、1956、『詳解ドイツ大文法』三修社。
- 三好助三郎著、1977、『新独英比較文法』郁文堂。
- 吉島茂・境一三著、2003、『ドイツ語教授法 科学的基盤作りと実践に向けての課題』三修社。
- Agricola, E. & Fleischer, W. & Protze, H. (1969, 1970). *Die deutsche Sprache Kleine Enzyklopädie in zwei Bänden*. Leipzig. VEB Bibliographisches Institut Leipzig.
- Helbig, G. & Buscha, J. (1987). *Deutsche Grammatik Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig. VEB Verlag Enzyklopädie Leipzig.
- Helbig, G. & Buscha, J. (1988). *Kurze deutsche Grammatik für Ausländer*. Leipzig. VEB Verlag Enzyklopädie Leipzig.
- Jägel, W.-D. (1976). *Elementarwissen: Deutsche Grammatik*. Paderborn. Schöninghbuch.
- Martens, C. & P. (1972). *Abbildungen zu den deutschen Lauten*. München. Max Huber Verlag.
- その他、現在日本で入手及び携行可能の下記独和辞書を参考とした。
- 国松孝二・岩崎英二郎他編、1990、『独和大辞典 [コンパクト版]』小学館。
- 倉石五郎編、1979、『コンサイス独和辞典 第5版』三省堂。
- 在間進・井口靖他編、2010、『アクセス独和辞典 第3版』三修社。
- 在間進編著、2004、『エクセル独和辞典』郁文堂。
- 在間進編、1996、『キャンパス独和辞典』郁文堂。
- 相良守峯編、1976、『木村・相良独和辞典』博友社。
- 相良守峯・菊池慎吾他編、1996、『独和中辞典』研究社。
- R. シンチンゲル・山本明他編、1992、『新現代独和辞典』三修社。
- 諏訪功・太田達也他編、2004、『パスポート独和・和独小辞典』白水社。
- 戸川敬一・榎本久彦他編、1992、『マイスター独和辞典』大修館書店。
- 富山芳正・杉本正哉他編、1991、『郁文堂独和辞典』郁文堂。

- 根本道也編著、2005、『やさしい！ドイツ語の学習辞典』同学社。
- 根本道也・恒吉良隆他編、2010、『新アポロン独和辞典 第3版』同学社。
- 信岡資生編著、2003、『スタート独和辞典』三修社。
- 信岡資生・佐藤俊一郎他編、2005、『ブリーマ独和辞典』三修社。
- 濱川祥枝・信岡資生他編、2008、『クラウン独和辞典 第4版』三省堂。
- 早川東三・伊藤眞他編、2007、『初級者に優しい独和辞典』朝日出版社。
- 細谷行輝・菅谷泰行他編、2000、『パスポート独和辞典 第2版』白水社。
- 前田敬作・山本雅昭他編、2003、『フロイデ独和辞典』白水社。